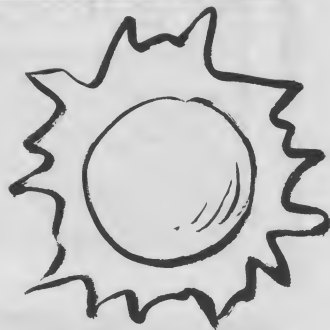
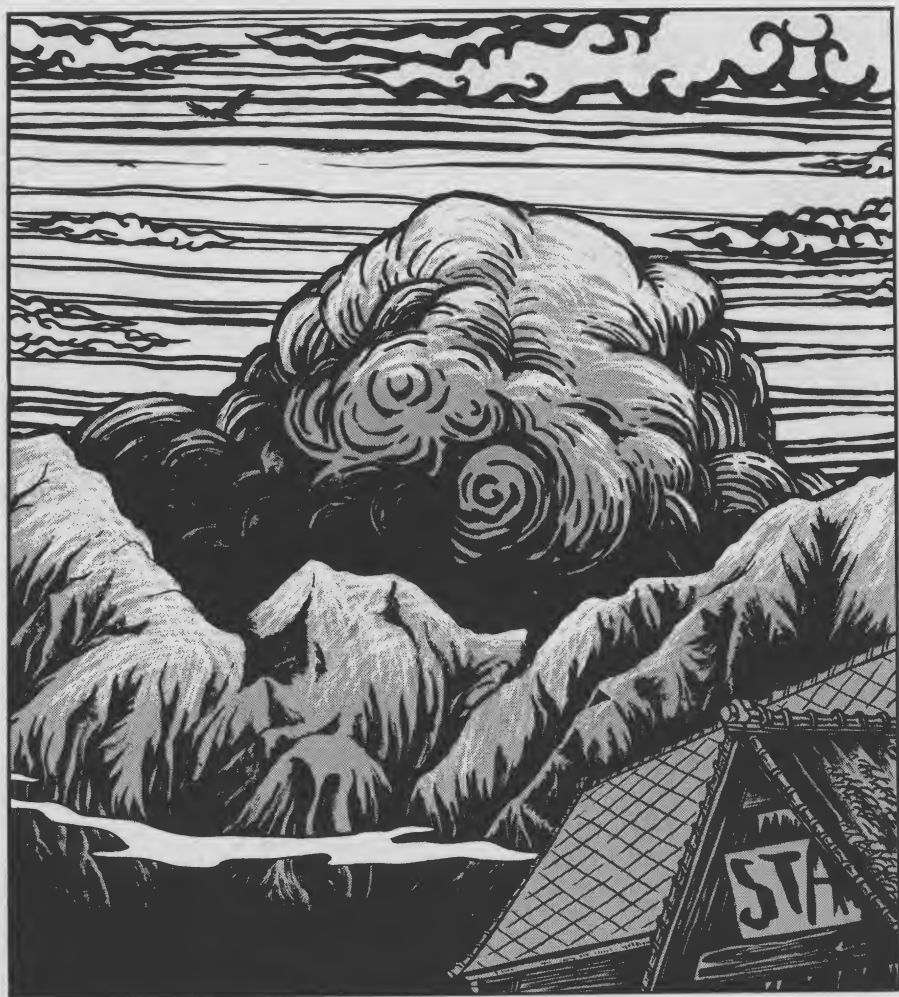
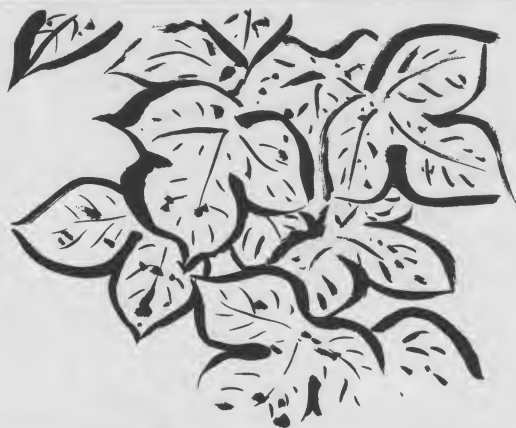
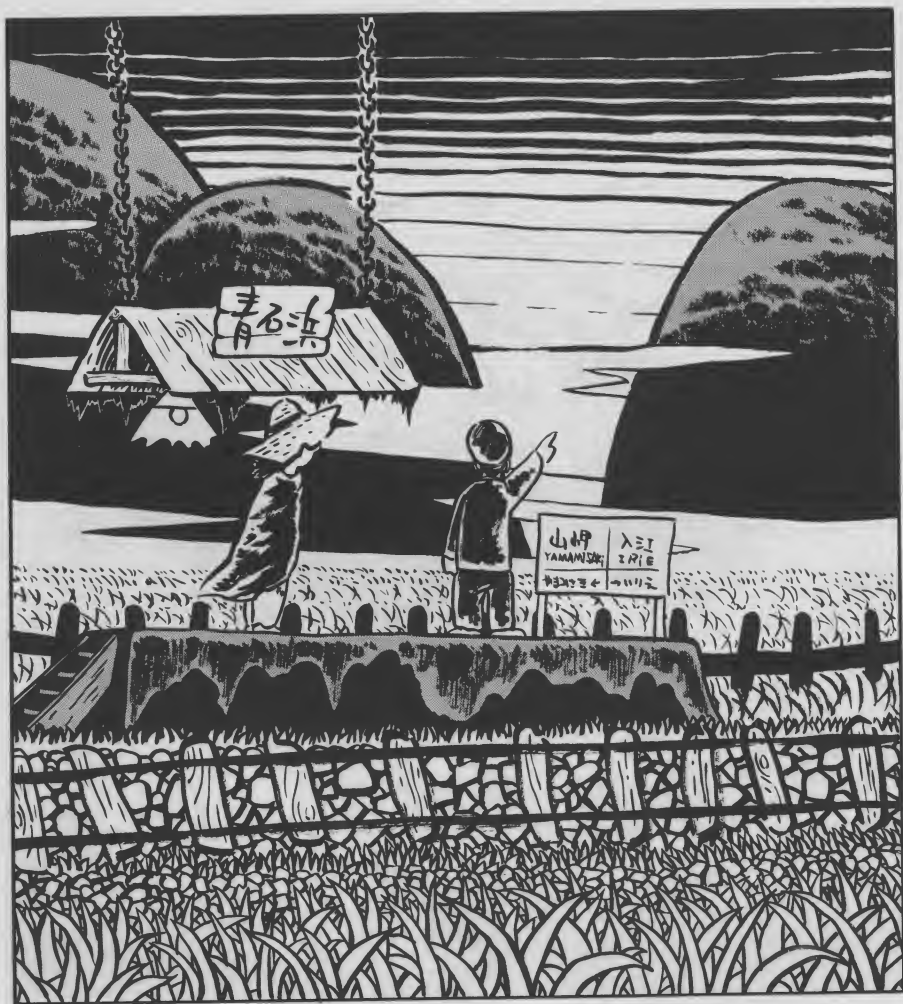
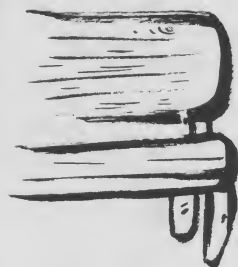
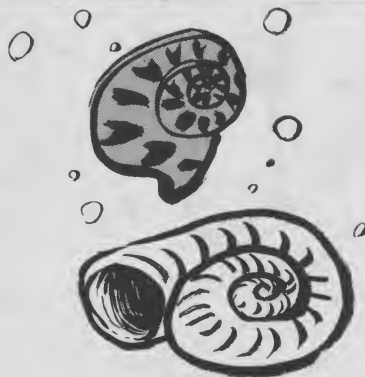
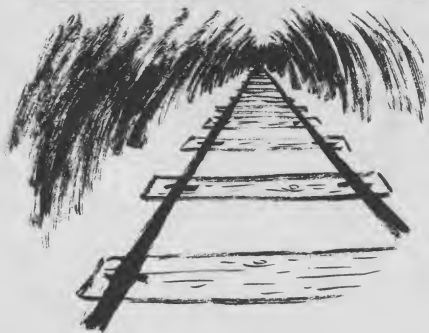
紫の伝説
乾いた雑草の匂いの中に白い半月
が漂よう せせらぎの音 季節はずれ
の風鈴 遠くの音を運んでくる北西の微風
陽に輝る黄金色の垂穂の波は妻ゝ秋 夢
自分の身体中の感覚器が夢中で秋を求める
虫の音 淋しい石垣 枯れ葉の小路 丘の夕べ
イメージ・STATION
NO.1
古川益三
付録………No. I

昭和25年10月21日、滋賀県に生まれる。デビュー作「野風呂」('69・7月号)

ときすまされた鋭さなんか
どこにもない山路に
盛りを過ぎた夏の光が
充満する
それでもどこからか
谷川の音が
歩き続ける間ずっと
ついてくるのでございます

こちらから早く連絡しなければならなかったのに、長井さんゴメンなさい。

並木のトンネルからは
ひんやりした空気が
流れ来て
路はたえずさえぎられ
そのカーブを曲るたびに
新しい景が展開される
のです

四方の山から湧き昇る
積乱雲は
蝉の声をこだまし
この数年の間幾人と数える
ほどの人間しか利用しなかった
小さな駅も　その中で
ひっそりと眠っている
ようでございます

夏の山の日没は
まじらぬ色を混ぜてしまう
透き通った赤と
クロロフィルの緑
あらゆるものが立体図形に
浮かびあがり盆地を山影が
走ります

昔ここは海だった
年老いた駅長は
プラットホームの電球を
ともしながらつぶやいた
この日駅はその役目を
すべておえるのでございます

昔ここは海だった
幾万世紀の幻の
投影図がその時写された

急速に冷気が山ひだを
伝って降りて来る
近眼の星は川底の玉じゃりを
ボウと白く灯もらして澱まず
終電のライトは幽かな秋を
照らしては
波のように遠ざかって
いきます

何かを待ち続けていた
という訳でもないが
この時になってみると
そう表現した方が自然な
気分でいられる
半ば眠りながらも夢のように
そんな想いが駅長の頭を
かすめたのでございましょう

本当に最後の終電が
出て数時間後——
それは山奥の小さな駅の
静かな静かな幕切れ
でしたが
まるで何か突然潮が満ちた
ように深夜プラットホームの
ベルが鳴り渡り
そしてそれはいつまでも
いつまでも鳴り続けたのです

あの山奥の駅に就任して来た時初めて乗った
電車に今また乗って
ゴトン　ゴトン　ゴトーン　ゴトン　ゴトン　ゴトーン

秋も深くなると池や湖の水辺には
色とりどりの枯れ葉が漂い
やがて静かな水底に堆積する
それはそれできれえなながめだけれど
僕にとってもっと素晴しいのは
その水の透明度である
水を画くのはむつかしい
水は無色透明無味無臭だ
大気もそうだけど人間にとって基本的と
いうか非常に多く必要とするものに
人間の感覚器は基準をおいている
　本来、身体に摂取する場合
そのたんびに刺激されていてはたまらんし
また不純物をたやすく発見するためにも
そうでなければならなかったんだろう
水はみな同じである　だけど春の水と
秋の水はやっぱし違って感じられる
それは自分にとって身体に摂取するという
本来の目的でもって水を必要としているの
ではないからかも知れない